漁場を示したのが図３である。漁期初めには島の南側に漁場が形成され、次第に時計まわりに移動して９月頃からは北東側が漁場となる。久米島の漁業者は、この頃から本格的なトビイカ釣漁業のシーズンを感じるのである。

⑦ 漁　法

トビイカ釣りの漁法について当真（1971年）は次のように記述している。

「沖縄のトビイカ釣漁業は、マグロの漁獲も目当てにしているため、マグロ釣用の一本釣具に餌（トビイカ）を掛け水深20～40mの深きまで釣糸を垂れ、トビイカの誘集とマグロの釣獲を狙った漁法である。船はあらかじめ潮帆を投入して潮流や風圧に流されるまま日没から夜明まで操業している。トビイカは友餌を捕食（友喰い）するのが大好物のようで、釣針に掛けたイカ（餌）に集中して喰いつく。したがって釣糸が重くなるので喰いついた様子が直ぐ分る。そこで、釣糸をたぐり揚げると餌に喰いついたまま、海面まで誘導されて浮上するので図４の手カギで１尾づつ引掛けて漁獲する。誘導されたイカの漁獲が終れば、また、釣糸を水中に投入するがこの場合大切なことは餌の喰いちぎれがひどくなっていたら新しい餌と交換して投入することである。このような状態を１晩中繰返し行なう。集漁灯は、クリ舟の場合は今もって石油ランプを使用し、５屯未満の和船型は蓄電池で40W位の電気を使用している。乗組員は何れも１人乗りが主で水揚高は、月夜になれば極端に悪くなり皆無に等しい場合もあるが豊漁年の最盛漁期には１晩200kg前後の釣獲もある。」

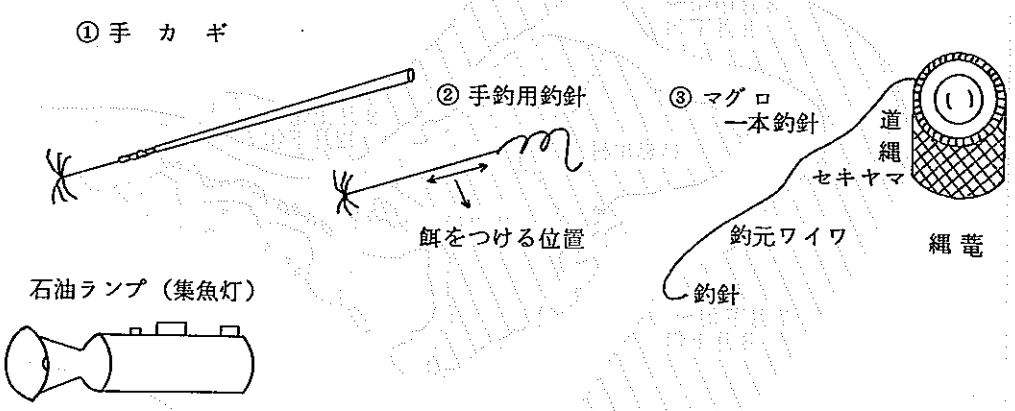

図４　沖縄のトビイカ釣具（当真　1971年より）

久米島においてもこれとほとんど同じ漁具漁法であるが、流されるまま操業するのは８月頃までで、島の北東部に漁場が移ってからは石をアンカーにして船を止めて操業するのが多い。

久米島ではマグロ等の大物釣り針のついた漁具（図４の③）をクビラーと称し、手釣り用